

People

Alexander Krichel アレクサンダー・クリツヒエル

●ピアノ
取材・文・写真 中東生

日本でベートーヴェンとモーツァルト
成長著しいドイツ正統派ピアニスト



■公演情報

◎日本モーツァルト協会 室内楽によるピアノ協奏曲Ⅱ
〈日時〉5月26日18時45分〈会場〉東京文化会館〈小〉〈出演〉アレクサンダー・クリツヒエル (p)、森田昌弘、三又治彦 (以上vn)、御法川雄矢 (va)、宮坂拓志 (vc)〈曲目〉モーツァルト『〈リゾンは森で眠っていた〉の主題による変奏曲』、『ピアノ協奏曲第11番』(ピアノ五重奏版)、『同第13番』(ピアノ五重奏版)〈問合せ〉パシフィック・コンサート・マネジメント 03・3552・3831

◎アレクサンダー・クリツヒエル ピアノ・リサイタル
〈日時〉5月28日14時〈会場〉宗次ホール〈曲目〉ベートーヴェン『ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》』、『同第14番《月光》』、『同第26番《告別》』、『同第23番《熱情》』〈問合せ〉宗次ホールチケットセンター052・265・1718

◎シリーズ《ピアニストとの出逢いⅢ》Vol.1・アレクサンダー・クリツヒエル ピアノリサイタル
〈日時〉5月30日14時〈会場〉横浜市栄区民文化センター リリス〈曲目〉5月28日と同じ〈問合せ〉横浜市栄区民文化センターリリス045・896・2000

2014年の初来日以来、6度目の来日を5月に控えているアレクサンダー・クリツヒエルが、1月15日、チューリヒ・トーンハレ・マールグデーリサイタル・デビューした。

「冒頭のベートーヴェン歌曲集『遙かなる恋人に寄す』(リスト編曲版)など、あなたのピアノが歌う歌曲は格別です。この曲が収録されているCDを亡くなったお祖母さまに捧げましたが、本番前には必ず電話していたお祖母さまの声が聞けなかったからか、いつものようにフレーズが流れず、辛そうでしたね。『今回はとくに悲しかったのですが、メランコリーには二つの側面があ

って、悲しみのなかに幸せもあり、自虐的ですが、それがこの曲には合っていると思います。遠くにいる大切な人を想い、すばらしい思い出に感謝する。でもすべては過去。その両面を表現するために、不安定な精神状態では舞台上上がることは有効な氣もありません」

「リスト『ヴェネツィアとナポリ』は、きらめく運河が見えるような『コンドラの女』から、悪魔的な終わりを飾った『タランテラ』まで、完璧なるイタリア。でした。この曲のあと、会場からすこい拍手があがったので、サクラを雇ったのかと思ったほどでした(笑)」

「ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』から『愛の死』(リスト編曲版)は、以前の録音から大成長が見えました。この曲で僕はいつもイゾルデといっしょに死ぬんです(笑)。あの長いクレッシェンドで死を渴望しているフレーズを弾いていると、自分の呼吸の間隔も長くなり、息をするのを忘れたりします!」

「ベートーヴェン『ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》』は集中力が一貫していました。『シェイクスピアの本』などから物語を創り上げて弾いています。第2楽章など退屈になりそうな部分は、よりゆっくり弾くのが僕流です。ウラディミール・クライネフ先生は『こんななによりゆっくり弾くのはお前とスウヤトスラフ・リヒテルだけだ』とあざわらっていましたが、リヒテルと同じなら嬉しいです(笑)。「狂人的」で『天才的』なベートーヴェン自身が弾いているように、が目標です」

「最後のラヴェル『夜のガスパー』もすばらしかったですが、日本のプログラムに話を移さなければなりません。『生涯250年+日本で初めてのベートーヴェン』なので、思い出の4曲を選びました。『ピアノ・ソナタ第14番《月光》』は9歳で初めて弾いたベートーヴェン、『ピアノ・ソナタ第23番《熱情》』は13、14歳のころ弾きましたが、早すぎて理解はできていませんでした。『テンペスト』は16、17歳のころに弾いて、初めてベートーヴェンの深さが解りました。『ピアノ・ソナタ第26番《告別》』は19歳のときに、ハノーヴァー音楽大学入試で弾いて800人中、1番になった曲です。ベートーヴェンは大好きで、同郷人として共通点も多く感じます。モーツァルト・プログラムは、彼自身が五重奏版を許可した『ピアノ協奏曲第11番』、『同第13番』で、オーケストラ版よりもっと細やかです。モーツァルトは演奏家の音を浄化し、メランコリー=喜びというポジティヴさが特徴です。二人の音楽を弾き分けるのも楽しみです」